

「食う男」

飯野文彦

ぼくは生きている。ほかのみんなは死んだが、ぼくだけは生きています。なぜぼくだけが生きていますか。それはかんたん。みんなが死んだのは、食べるものがなくなっただけ。ぼくだけ食べるものがあつたからだ。

ぼくは、子供の頃から馬鹿だと皆に言われていた。馬鹿だから馬鹿にもされし、いじわるもされた。中でもいちばん多かったのが、変なものを食べさせられたことだ。

「おい、あやひこ。これ食べてみろよ」

そういうのは、たいてい、あきら君だ。あきら君は、ぼくをいじめるのが何より好きなのだ。

いやだなあと思いつながら見ると、ゴキブリだった。だからぼくは笑いつながら、「これ、ゴキブリだろ。食べられないよ」

と言つた。

なぜ笑いつながら言つたかという、もしもぼくが怒つたりしたら、あきら君は、「生意気だ、逆らつた」

とみんなを誘って、ぼくを殴ったり蹴ったりする。ぜったいにそうするとわかっているからだ。

「何言ってるの、おまえ。知らないの。これゴキブリに似てるけど、いま流行ってるんだぜ」

あきら君がそういうと、ほかの子供たちも、同じように言った。

「テレビでコマースヤルしてるだろ。見なかったのか？」

「うまいんだぞ、これ」

そんなことを言われると、ぼくの気持ちはずんずんゆるんできてしまう。そうしてほんとうにそうだと思うってしまう。

「ちっ、せっかくやろうってのに、人の厚意を無にしやがって」

「やめよ、やめよ」

そんな風に言われると、何てぼくは悪いことをしたんだ。そう思う気持ちと、そんなにおいしいなら食べてみたい、という気持ちがぱっと爆発してしまう。

「やっぱり食べさせて」

気がついたら、ぼくは言っていた。

「何だよ、今頃」

「ごめん。うっかりしたんだ。うん、テレビでやってたよね。うん、見た見た。一度食べてみたいと思ってたんだ。お願いだから」

「そんなに言うなら、しかたがないな」

ぼくはそれを受け取り、食べた。ガリガリと音を立てて嚙むと、中から苦い汁がしみ出して、顔が歪んでしまう。

それを見て、あきら君たちは大笑いした。

「こいつ、ゴキブリ食べやがった」

「きたねえ。ゴキブリ喰いやがった」

そこでやっぱり、悪戯されたんだとわかり、吐き出す。気持ち悪くなって、ゲロまで出してしまう。それを見てみんな、笑う。

だがぼくは怒らない。怒るよりも、かなしくて涙が出る。するとさらにみんな笑うので、ますます悲しくなる。でも、いつまでも泣いているわけにはいかない。そんなことをしたら、あきら君たちが怒り出すからだ。

「てめえ。先生や親にチクんじやねえぞ」

「もし言ったら、ぶっ殺すからな」

そう怒鳴られると悲しいよりも、恐い。あわてて涙を拭いて、へらへらと笑いながら、

「わかってるよ。誰にも言うもんか」

と言う。みんなは安心した様子で、

「ばかをからかうとおもしろえや」

と笑いながら去っていくのだった。

ゴキブリは美味しくない。でも食べられる。蛇やカエルのほうが美味しい。だから見つけたらつかまえ、食べた。土団子は美味しいとは言えないけれど、土の種類によって、ずいぶんと食べやすかったり、まずかったりするものだ。

ほかにも新聞紙、雑誌、ちり紙、コンクリートの欠片、煙草、マッチ、画鋸やガラスなんかも食べさせられた。これらはやつぱりダメだ。食べ物じゃないんだから。

あの頃は、ひどい悪戯をするなあと思っていたけれど、考えてみれば、そのおかげでほくだけがこうして生き残れた。

戦争が起きたんだと思う。すごい爆弾が、あっちこちに落ちて、父ちゃん母ちゃんともいつの間にかはぐれて、一人になっていた。

ぼくは山にこもった。何人かの人とあったけれど、いつしかそれらの人も別れて、一人になっていった。運が良かったんだと思う。一人になっても、何でも食べられるように鍛えられていたから。

しかし、実はすべてが毒だったんだ。山の中で偶然出会った、おじいさんが教えてくれた。そのときぼくは木の皮や土を食べていたんだ。それを見たおじいさんが言った。

「そんなものを食べると死ぬぞ」

「どうしてですか？」

「すべてが毒で汚染されている。この世界にあるすべては敵の蒔いた毒で汚染されているんだ」

「ぼく、元氣ですよ」

「まだ量が少ないからだ。このまま食べつづけたら、おかしくなるからやめろ」

「それなら何を食べるんですか？」

訊ねたらおじいさんは、自分がすみかにしていた場所に連れて行ってくれた。地下に掘ったシェルターというところだった。おじいさんは金持ちで、戦争が起こる前に、それをつくっておいた。

しかし戦争がとつぜんだったので、そこに入れたのはおじいさんだけで、ほかの家族はダメだった。

「食料も缶詰以外は危険だから、食べないでいるが、まだまだある。水も充分にある」
おじいさんとは長いあいだいっしょに暮らした。十年以上だと思ふ。おじいさんはぼ

くにいろいろなことを教えてくれた。こうして文章が書けるようになったのも、おじいさんのおかげだ。

おじいさんはある日突然死んだ。ぼくはまったく知らなかったんだけど、蓄えておいた食料や水がなくなつたのだ。それを悲観したおじいさんは、首をつつた。

（あやひこ。私はもう生きていく望みを失つた。先にいつてるよ）

悲しかった。父ちゃん母ちゃんと離ればなれになつたときよりも悲しかった。

一人になつたぼくはシェルターを出て、山を下りた。そうして町に出たけれど、誰もいない。人はもちろん、犬も猫も鼠も蛇もカエルもいない。ゴキブリはいた。何を食べているのか知らないけれど、たくさんいた。

前にも書いたけれど、ゴキブリはまずい。でも生きるために食べた。ところがある日、ゴキブリがいなくなつた。ぼくが食べ過ぎたせいだろうか。ぼくの近くにいると食べられると覚えて、それで逃げたのか。

ゴキブリが消える前に、長い間、冷たい雨が降つたから、それに原因があるのかもしれない。そうだ、ぼくのせいじゃない。雨のせいだと信じた。ゴキブリにまで嫌われたとは、いくら嫌われ者のぼくでも思いたくはない。

雨が止んだ後は、すべてがまずくなつた。きつとあの雨は、ゴキブリだけではなく、

すべてダメにしてしまったのだ。まずいだけではなく、何を食べても吐いてしまう。

ぼくも困った。しかし……ほんとうのことを書こう。嘘をついても仕方がない。どうせ誰も読まないんだから。と、書いたところでしばらくぼくは笑った。

昔、ぼくをいじめた一人の口調で、頭に浮かんだからだ。

「あやひこさあ、誰も読まないと知ってて、なぜ書くわけ？」

ほんとだ。そんなことは馬鹿なぼくにだってわかる。どうして書くんだろう？

考えた。わかったこと、ほかにすることがないから。それに……これも誰かに聞かれたら、馬鹿にされるだろうけれど、どうせぼくは馬鹿だからいいやと思って書く。

どこかに誰かが生きていて、いつかぼくの書いたこの文章を見つけてくれるんじゃないか。誰かが生きていて、ぼくが死んだ後にここに来たとき、この文章を読んだら、

「へえ、馬鹿でも長生きしたヤツがいるんだなあ」

と思ってくれたら、うれしいと思う。

いや、それもちがうか。なぜなら、これを読んだ人は、よけいぼくのことを馬鹿にするだろう。

「なんて、野郎だ。そんなことをしてまで生きていたくなんかねえよ」

そう言うかもしれない。

「いやいや、馬鹿でもこれだけ生きられるのは、すごい」

そう言ってくれる人も、いるかもしれない。

「いや、これは真つ赤な嘘だ。そんなものを飲み食いできたとしても、それだけで生きていられるわけがない」

そう言う人もいるだろう。ぼくもこの意見には賛成だ。ぼくだって、そう思った。だからそうしなかった。

ところがついにそれしかなかった。そうするしかなかった。喉が渴いたし、ひもじかった。それでもぼくも人間だから、それだけはやめようと抵抗した。しかし……。

正直に書きます。ぼくは子供の頃に、それらを飲み食いしたことがある。前に書いたように悪戯された。

あきら君にだ。一度や二度ではない。それらを飲み食いさせられた悪戯が、ほかの何よりもいちばん多かった。

もちろんいやだった。けれども、何度か続けていくうちに、いやではなくなった。いやでなくなったどころか、正直に書きますと誓ったので、書きます。好きになったのだ。もちろんあきら君をはじめ、誰にもいわなかったけれど、どちらも美味しい。ものすごく美味しい。

母ちゃんの作った料理と同じくらい美味しいと思った。母ちゃんの作った料理を食べているぼくが出したものだから、美味しいのもとうぜんかと思った。

それは馬鹿な考えだ。人間は、自分が出したおしっこやうんちなんか食べたりはしない。食べないから、悪戯して無理やり食べさせるのだ。食べると、あまりにぼくが馬鹿だとわかるから、おもしろがるのだ。

でも、何度も書くけれど、正直に書くと、ぼくはどんな飲み物よりも、おしっこが美味しい。どんな食べ物よりも、うんちが美味しい。ああ、書いてしまった。だからぼくは馬鹿なんだろう。

ほかに何もなかったから、仕方なくそうしたと書けば、かわいそうにと同情してくれる人もいるだろう。ダメだ。ぼくには嘘は書けない。ぼくはしょうべんとうんちが大好きだ。

ついにほかに何も食べられなくなって、本格的にというのも変な話だが、ショウベンとうんちだけで暮らすようになった。以前より元気になった。活動的になった。身体も痩せるどころか、太った。だからどんどんおしっこもうんちも出て、ますます元気になった。

馬鹿だと思われるだろうけれど、ほんとうのことを書いて、すっきりした。これから

いつまで生きられるかわからないけれど、これからもぼくはしようべんを飲み、うんちを食べて生きていくつもりだ。それしか生きる道はないし、それしか楽しみはないのだから。

七十歳の誕生日に、いのあやひこ。

◇ ◇

私は特殊ガラスにさえぎられた向こうの部屋にいる男を見た。
我々が保護した、唯一の人類の生き残りである。そして彼が書いたのが、今私が読み終えた文章である。

いのあやひこ、それが男の名前らしい。いのあやひこは、何を与えても飲み食いせず、文章にあるように、自分の排泄物を食している。年老いてはいるけれど、小太りの体型をしている。医師によると、どこにも悪いところはなく、あと二十年はまちがいなく生きるだろうとのことだ。

科学者は言う。

「完全なまでのリサイクル。究極の生物として、研究の余地があります」

私も同意する。いのあやひこのようなになれば、我々の星で深刻化している食糧問題、老化問題を解決する糸口を見いだせるかもしれない。だがしかし……。それまでして、

生きていく価値があるのだろうか。価値以前に、生物としてのプライドがゆるさない。

私は扉を開けて、いのあやひこのいる部屋に入った。扉をあけるなり、凄まじい悪臭にあわてて、特殊マスクをつけた。

「おい、食事は終わったのか」

仰向けに寝ているいのあやひこに声をかけた。いのあやひこはあくびをしながら身体を起こして、あぐらをかいた。ぼりぼりとはげ上がった頭を掻きながら、私を見つめて、馬鹿にしたように笑った。

全身の血液が、瞬間に沸騰したかのようにだった。地球人などという下等な種族の、その中でももつとも下劣な男に、屈辱的な表情をされ、我慢できなかった。

「きさまなど、生きていく価値などない」

拳をにぎりしめ、足を踏み出すと、いのあやひこはおびえるどころか、声を上げて笑った。

「きやははは。怒ってる怒ってる。ざまあみろ、ざまあみろ」

「なんだと」

「そんなお面つけても、おまえが誰かわかってるぞ。おまえは、あきら君だ。そうだから。当たったんだろ。へん、もうぼくは昔のようにやられてるばかりの馬鹿じゃないんだか

らな」

「ほぎくな。あきら君などという者は、とうの昔に死んでいる」

「嘘だよ。嘘についても、わかる。あきら君だ。おまえは、あきら君なんだよーだ」

カツとなった私は、感情に流され、特殊マスクを外していた。投げ捨て、顔を見せ、

「これでも私が、あきら君——」

と怒鳴りつけた刹那、私の顔を異物が直撃する。まともに目と鼻に入り、たまらずしやがみこむ。

「どうだ、あきら君。おもいしったか」

いのあやひこが私に襲いかかってきた。

「どけ。私は別人だ」

「嘘だ。だまされないぞ。長いあいだの恨み。思い知れ」

いのあやひこは私にしがみつき、私の顔を舐めた。自分の排泄物を味わい、さらに、「うんちもおいしいけど、おじいさんが死んだ後、食べたなら、もつとおいしかった。あきら君はどうかかな？ いじわるだから、まずいかな？」

鼻をかみちぎられ、悲鳴を上げると、いのあやひこは、笑いながら叫んだ。

「うまいよ。ははは、あきら君、意地悪だけど、とつてもうまいや。どうやらうんちと

か意地悪とか変なものの方が、おいしいのかもしれないね」
しがみつきたいのあやひこは、夢中で私を喰らう。